

第 4 回人間の安全保障学会で講演しました。(2014/9/6-7)

場所：川内北キャンパスマルチメディア棟、環境科学系研究科（仙台市）
テーマ：「人間の安全保障のフロンティア養成」

9月6日、7日（土、日）に東北大学川内キャンパスと青葉山キャンパスで開催された第4回人間の安全保障学会で、江川新一教授が招待講演を行いました。人間の安全保障(Human Security)の概念は、1994年に国連のUNDPにおいて、それまで加盟国の安全保障が中心であった国連の活動を、大きく転換させて人間の安全保障を守るための活動に加えてそのための主張を行っていくことに転換させたキーワードとして大変重要なものです。人間の安全保障学会は、前進の人間の安全保障フォーラムを発展する形で2011年に創立されています。第4回にあたる今回は、東北大学で環境科学研究科、医学系研究科、農学研究科、国際文化研究科の4研究科が共同で運営するヒューマンセキュリティコースの代表でもある国際文化研究科のブシュパール・デニール教授が主催されました。

1日目のオープンセッションⅠでは、東日本大震災で被災した南三陸町の佐藤仁町長、浪江町の馬場有町長、チェルノブイリ原発事故研究者のボロディミール・ティーヒー博士が特別講演を行いました。佐藤町長は復興にまだまだ時間のかかる現状とともに、とくに女性、子供の意見を災害対応の早い時点から取り入れるべきだったとの見解を示しました。また、馬場町長は、発災から現在までつづく浪江町役場の移転と、全国に散り散りになった住民とのコミュニケーションの難しさ、対応における政府や情報発信のあり方などについて痛切な思いとともに報告しました。ディーヒー博士は、チェルノブイリ原発事故において、さまざまな要因によって情報が欠落していること、住民の安全保障がおざなりにされていること、核放射線事故においてデータをとることの大切さについて講演しました。また、オープンセッションⅡでは、国連UNDPに長く携わったマサチューセッツ大学ボストン校のクレイグ・マーフィー教授が『人間の安全保障』という概念がどのような経緯で、国連のなかで重要な位置を占めるようになったか、また人間の安全保障についてどのように考えるべきかについて自分の体験も交えて講演しました。パネリストから、最近のわが国で起きているヘイトスピーチの問題や、人間の安全保障について様々な状況が考えられることなどが示されました。

江川教授は2日目に人間の安全保障に関わる研究者の養成というテーマで、ヒューマンセキュリティコースにおける災害医学の講義と学習のプロセスにもとづいたカリキュラムプランニングについて講演しました。ヒューマンセキュリティコースで授業を聴講していた修士の何名かが研究成果を発表し、とくに2004年のインドネシアでの津波被害と東日本大震災における復興過程の違いについて、ヒューマンセキュリティの観点から、インドネシアでは欠乏からの解放を主にし、日本では将来の恐怖からの解放を主にしているという違いがあり、それが復興の速度の違いになっているとの指摘があり、大変参考になりました。



災害医学のゴールと聴講者



学会の様子

文責：江川新一（災害医学研究部門）